中生勝美編

『植民地人類学の展望』

風響社　2000年　274ページ

小田　亮（おだ　まこと）

I

本書は，日本の植民地と人類学との関係を扱った，初めての論集である。その背景には，日本の民族学・文化人類学が日本の植民地主義や戦争との関係について議論してこなかったという実情がある。植民地と人類学の関係について，日本の人類学者がまったく議論してこなかったわけではない。むしろ最近ではそのような議論が盛んになされているといってよい。けれども，その多くは，西欧諸国の植民地になった地域を扱うものか，海外のポストコロニアル理論を輸入した議論であった。

本書の目的は，編者の中生勝美もいっているように，戦中の民族学的研究の戦争責任を「告発」することでも，その民族誌的リアリズムを「脱構築」することでもない。本書に収録された，扱う対象もスタイルも個々に異なる各論文にほぼ共通してみられることは，戦中の民族学的研究がもつ個々の事情を当時の歴史的文脈に置いてみるという作業である。すでに輸入されたポストコロニアル批判の議論に洗礼をうけている読者は物足りなさを感じるだろうし，日本の民族学の戦争責任を「告発」する姿勢をもっと明確にすべきだという者もいるだろう。しかし，「脱構築」も「告発」も，その対象を「戦争協力した学者」とか「現地人を研究材料として上から見下ろす学問」というように，単純化・一元化しなければできない。本書は，そのような単純化・一元化を避け，しかも「日本のオリエンタリズムの克服」をめざしており，そのねらいはいい線をいっていると評価したい。

II

本書の「序論　植民地人類学の射程」で，編者である中生勝美は，本書が掲げる「植民地人類学」の具体的なひとつのモデルを提示している。それは，植民地的状況において書かれ古典として読み継がれてきた民族誌を，その対象となった地域を「再調査」することを通して，「それが書かれた歴史的文脈に置いて，政治的経済的状況との関連で民族誌の書き方や，民族誌の支柱となった理論を脱構築する」(29ページ）というものである。それは「結果としてフリーマンの『マーガレット・ミードとサモア』の手法に似ている」(28ページ)とされ，それ以外にも，シャロン・ハンチンソンらのヌア族（ヌエル族）の再調査によるエヴァンス＝プリチャードの民族誌の再検討や，ダグラス・ラミスが『内なる外国』で行っているルース・ベネディクトの『菊と刀』批判などが，例として挙げられている。

ただし，古典的民族誌の再検討がどうして理論や民族誌の書き方を脱構築することになるのか，その脱構築がポストモダン理論による脱構築とどう異なるのかについての答えは提示されてはいない。フリーマンの『マーガレット・ミードとサモア』は，そもそも歴史的文脈に置きなおして脱構築するという性格をもつものではなく，むしろミードの描くサモア像が真実ではないという批判に重点が置かれたものであり，エヴァンス＝プリチャードの民族誌の再検討についても，「再調査をした研究者たちのとまどいは，現前の事実がエバンズ・プリチャードの調査した時代から半世紀を経て対象社会が変化したのか，エバンズ・プリチャードの記述に歪曲があったのか，また調査資金を支援したスーダン政府というパトロンの要請に配慮したことで，彼が偏った記述を残したのかは判然としない」(29ページ）というように，「真実」がいかなるものであったかが問題とされているところをみると，中生のいう人類学史や古典的民族誌の再検討とは歴史的「真実」の探究であるように思える。だとすれば，「真実」を書くというリアリズムのレトリックそのものが批判されている状況

において，それがどう脱構築に繋がるのか，説明が必要であるように思われる。

2番目の論文「大東亜共栄圏のインド――戦中の邦語文献におけるカーストと民衆ヒンドゥー教――」で，田中雅一は，インドの民衆ヒンドゥー教やカーストについての戦中の言説を，⑴ヒンドゥー教やカーストにみられる無秩序や停滞といったインドの劣位を不変で超歴史的な本質とみなす言説（西洋流オリエンタリズム），⑵インドの無秩序と劣位を英国植民地支配の犠牲によるものとみる言説，⑶否定的に語られていたカーストにも，西洋国家に優る東洋的国家の血族的な基礎という積極的な価値をみる言説（オリエンタリズムの優劣を逆転させたオキシデンタリズム）の3つに分けて紹介し，これらのインド観は戦後にも継承されているという。⑴のオリエンタリズムはカースト制度やヒンドゥー教を近代化の阻害要因とする戦後の言説に継承され，⑶のオキシデンタリズムは戦後の日本のイエ論に重なっている。そして⑵についても，インドの女性たちの強いられた「極端な自己犠牲の精神」を今日のダウリー殺人の一因とする謝秀麗の語りを挙げ，それが「そこで犠牲者としてのインドと女性とはどちらも主体性のない存在として口を閉ざされてしまう」点で，戦中の「犠牲者としてのインド」という語りと同質のものだと指摘している。

最後に田中は，戦中の河東忠の文章を引用しながら，「河東の文章はインドが迷信の国であること，それについて英国はなんの改革も行わなかったことを……鋭い口調で論じている。しかし，かれはそこから……競泳などに熱中する若者たちへと視線を移し，そこにインドの可能性を求めようとする。わたしには異文化を一枚岩とみなそうとしない，こうした記述にこそ，ポスト大東亜共栄圏の状況を克服する可能性が潜んでいるように思えてならない」(65ページ)と結んでいる。田中が，フィールドで見聞する日常生活の多様性や個別性を一枚岩の記述に囲い込まないことにポストコロニアル的状況の克服の可能性を見出そうとしていることは理解できるが，引用された河東の文章は，因習に囚われた老人たちと文明化の未来を担う若者たちとを二分法的に対置するもので，「文明化の使命」を掲げる植民地主義的言説では紋切り型といってよい。それは，犠牲者であるインドの女性たちの極端な忍耐強さと目覚めたフェミニストたちとを対置させる謝の語りと同質の語りであり，対置されたそれぞれの集団は一枚岩とされている。それを克服するには，「迷信に骨の髄まで蝕まれて」いる老人たちや，「極端な自己犠牲の精神」を強いられてきた女性たちの日常的実践にこそ多様性や（受動性を含む）主体性を見出していくことが必要とされているのではないか。

次の百瀬響「北進と民族学――河野広道の軌跡を通じて――」は，編者のいう「植民地人類学」にもっとも忠実な論文である。ここで百瀬は，昆虫学者であり北海道の民族学と考古学の草分けとされる河野広道（1905～63年）の研究の歴史的・個別的文脈を考察している。百瀬は，河野が「軍事昆虫学」と称して北樺太の吸血昆虫の調査などをしたが，それは北方の自然環境での軍事行動のためだけではなく，そこに定着して生活するために必要な「森林昆虫学」や北方の生活文化の研究に繋がっていたと指摘する。そして，河野の「北方文化論」は，資源収奪型の植民地経営が北方での移住者の定着率を低下させ，定住に必要な「北方文化」の建設を妨げていると批判するとともに，経済的利益から離れた精神性を強調する従来の北方文化論と違って，逆に「“土着”の北方人」の経済的利益を優先する論を説いたと述べ，そこに科学主義とともにマルクス主義の影響をみている。

百瀬は，「当時の時代背景に加え，関与した研究者らの個々の『事情』をも合わせて論じることは，単純な過去の批判に堕することのない，より『実際』に近い日本民族学の歴史を記す上でも必要である」（104ページ）という。そしてアイヌ研究者としての河野が「アイヌ解放運動」の文脈において，「アイヌを単なる研究材料としてしか見ない」典型的な「和人のアイヌ学者」とされていることについて，そのイメージが，アイヌ出身の言語学者知里真志保との学説上の論争における知里の河野に対する言説を「アイヌによる批判」として囲い込むことによって形成されたものと指摘し（110ページ，注12），広道には

父常吉と同様に多くのアイヌと物心両面における交流があったことが現在河野家に残されている手紙などからわかると述べる。個別性を重視する百瀬の姿勢に評者は賛同するが，研究者の個々の「事情」を見てしまうことが，「告発」を困難にすると同時に，和人とアイヌの間の支配－被支配関係を隠してしまう恐れもある。個々の事情を見ていくことがどのように従来の研究の「脱構築」へと繋がるのかという問題がここにも現れているように思われる。

4番目の宋秀環「日本統治下の青年団政策と台湾原住民――アミ族を中心として――」は，編者のいう「植民地人類学」とは違ったものである。この論文で，宋は，台湾アミ族の伝統的な年齢階級制が，日本統治下で皇民化運動を推進するための「青年団」へ，その類似性ゆえに速やかに組替えられていったと同時に，その年齢階級制の原理そのものによる抵抗によって，皇民化・日本化はいわれているほどには浸透していなかったと論じている。年齢階級制がないタイヤル族では，青年団が同化や皇民化政策を浸透させるのに一定の役割を果たしたのに対して，厳密な年齢階級制が存在したアミ族では，若者が年長者に影響を与えることが無理という矛盾をもっていたゆえに皇民化運動を浸透させることは困難だったというわけである。宋は，「被支配の彼らはいくら権威の下に置かれても，外来のものを全面的に受け取るわけにはいかない。彼らは『自身の伝統的な観念や価値に基づ』いて，戦略的にそれを受けとったのである。この戦略は外面的には，受け取ったと見えても，内面的では拒否していたといってよい」(160ページ）と述べている。宋の論文は，たしかに日本の植民地統治を扱ったものだが，戦前の民族誌や民族学的研究を歴史的文脈に置くという「植民地人類学」とは異なり，ポストコロニアル理論の影響を受けた近年の日本人人類学者のスタイルに類似しており，編者の意図がどこにあるのかよく分からなかった。

崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」は，他の論文と違い，植民地時代の朝鮮民俗学に関わった日本人学者と被植民者である朝鮮人学者の双方の研究を扱っているが，秋葉隆の研究と朝鮮観を詳しく取り上げている点では，「植民地人類学」に忠実なものといえるだろう。崔は，同化政策と近代化を推進する朝鮮総督府主導の調査研究において，日本人と朝鮮人の学者の相互協力によって始まった朝鮮民俗学について，学者間には民族による差別はなかったが，互いに協力しあうといってもあたかも日本人学者の被調査者のように扱われた朝鮮人学者は，日本人学者への反発と刺激によって朝鮮民俗学を立ち上げたという。そして，戦後の韓国民俗学は，同じく反日ナショナリズムに出発点をもつために，総督府の調査研究資料や日本人の研究成果に対して先入観による否定的評価をする傾向にあるが，双方がそのようなエスノセントリックな感情論から脱却する必要があると説く。

また崔は，京城帝大にいた秋葉隆の朝鮮観を，入手した未発表原稿を使いながら明らかにしている。そこでは秋葉への評価は揺れ動いているようにみえる。まず，秋葉が「本国に対しては朝鮮の保護者のような態度を取り，朝鮮に対しては帝国主義者のような態度を取ったようである」(182ページ）としながら，「朝鮮を客観的に見ようとしていた」という(193ページ)。そして，「秋葉の公平な視点の限界は，朝鮮の人の美点とか良い点ばかりを見ることこそが偏見であるとは思わなかったことである」(194ページ)と指摘しながら，「このような言説は，朝鮮について悪く言う人が多かったので，……全体的に公平にしようという考えであったのであろう」(195ページ）とも述べている。また，秋葉の研究が「内鮮一体政策」に利用されたとしながら，秋葉は，朝鮮が健全な共同社会を維持しながら発展していく可能性を日本より大きくもっていると評価していたと指摘している。評者は，秋葉が朝鮮の良さとして「共同社会」や「原始宗教」を強調するのは典型的なオリエンタリズムといえると思うが，崔は，秋葉が，民族学者としては当然インフォーマントに丁重に接するけれども，当時としては当たり前の植民地主義者だったといっているだけのようにみえる。

最後の中生勝美「内陸アジア研究と京都学派――西北研究所の組織と活動――」は，敗戦直前に張家口に設立された西北研究所の組織と活動を，当時の

所員の聞き取りによる証言も使いながらまとめたもので，そこで組織された蒙古草原探検隊の成果が，所長で探検隊長だった今西錦司や隊員の梅棹忠夫らによって，戦後「遊牧論」となり，京都大学の生態人類学の形成に繋がったこと，また，そこでの研究が蒙彊連合自治政府の統治政策と関わりがあったとしながら，ソ連国境付近に居住していたオロチョン族やイスラム教徒の動向調査と宣撫工作に比べてモンゴル人への宣撫は軍事的側面からは重視されていなかったため，西北研究所のモンゴル研究は自由な研究が可能だったこと，国策に沿った研究は民族研究所との共同プロジェクトであったイスラム研究のみだったことを指摘している。西北研究所の当事者へのインタヴュー調査をしながら歴史的事実の「発掘」を行う中生の地道な作業は，日本の民族学・人類学史を書く上での貴重な基礎研究となろう。けれども，この論文だけにかぎれば，同研究所に多くいた「戦後の民族学を支えてきた研究者」が，たまたま国策から離れた自由な研究ができ，その資料を持ち帰ることができたという，同研究所の個別的な「事情」を認識することが，どうして「現在の民族学・人類学の存在根拠を考える上で重要である」(247ページ）のかという疑問は残った。

III

各論文へのコメントを述べてきたが，最後に，本書の作業がいかに「日本のオリエンタリズムの克服」に繋がるのかについて考えてみたい。研究者の戦争協力や植民地主義やオリエンタリズムを「告発」する語りは，告発の対象を単純化・一元化して「一枚岩」とみなす点で，それが批判しているはずのオリエンタリズムと同質の語りになってしまう。評者が本書を高く評価するのは，そのような単純化・一元化を意識的に避けようとしている点である。田中論文では，「異文化を一枚岩とみなそうとしない」記述に「ポスト大東亜共栄圏の状況を克服する可能性」を見出していたし，百瀬論文では，「研究者らの個々の『事情』をも合わせて論じること」が「単純な過去の批判に堕することのない」歴史を記す上で必要だとされていた。文化を「一枚岩」とみないことがその内部の階級やジェンダーや世代などを一枚岩とみなすことに繋がる危険性や，個々の事情の個別性を論じることが全体的な支配－被支配関係を隠してしまう危険性が見過ごされていたとはいえ，評者は基本的にそのような姿勢に賛同したい。

しかし，最も重大な問題は，歴史的事実の検証という作業が，「真実」の探究を前提としている点で「告発」の語りやオリエンタリズムの語りと同質になることにある。編者は「あとがき」で，人類学による「記憶の発掘」と歴史学による「記録の発掘」の２つをつなぐことを説いているが，フィールドで「植民地体験を語ってくれる人々の記憶」とは発掘を待つ「タイムカプセルのようなもの」ではなく，現在の生活のなかで生きている「現実」である。そのような「生きた記憶」は，告発に役立つ歴史的事実でも脱構築すべき虚構でもなく，現在の人と人との繋がりにおいてリアリティを構成しているものである。そのような記憶の個別性と共同性に注目することが，「告発」でも「脱構築」でもない，オリエンタリズムの克服に繋がるのではないだろうか。

（成城大学文芸学部教授）